

保育園児の言語発達と入園時年齢

— 絨然児といわれた6才児の事例をめぐって

東大、保健学科、母子保健学教室

長谷川 孝子

私は、保育園への入園年齢時の問題、つまり、子供がはじめて集団保育にくみ入れられる年齢時期の問題を、子供の適応力という面から関心をもち、保育園での観察研究を続けている。この発表は、この“適応”というテーマの中で見出した一事例をめぐって、入園期—適応—言語の発達という点を考えたものである。これは、保育園児の適応力ということについて、シュミット・ホルマーが、6才という年齢を、critical な年齢目とよび、その理由として、この年齢時期、適応の困難さが最高に達する時であり、又6才児前期は、歩行、ことば、食事の自立、排泄の自立が同時に学習される始める時期であるため、子供にとって、大変負担の多い、不安定になりやすい時期でもあるため、二重の意味で環境の変化が望ましくないと述べていることにもとづき、それでは、もしこの時期に環境に大きい変化があった場合、四つの課題、歩行、ことば、食事の自立、排泄自立のうち、なにが一番ダメージをうけ、しかも後まで、その影響をうけるかと考えた場合、一番人間的で、それゆえにもろい部分、すなわち、ことばが影響をうけると考えられる。ことばは、保育者との交流を通じて育っていくものであり、5コルマ—のいう、危機的な年齢目（とくに7カ月ごろから、1才11月ごろ）迄とホルマーはいつています—これは日本でいうと、いわゆる人見知りがはじまった前後の子供達）においては、この交流が一度切れて、又重新に再開されるまでの期間が、他の月令児群よりも長くかかるであろうと思われ、このことばの発はじめる時期の、いかに足らぬ状態が、後の言語発達に何らかの影響を残すのではないかと考えられる。

Ⅱ部 事例研究

田中二郎（仮名）は、6才の保育園児であり、1才6カ月で保育園に入園、二年前前、絨然児といわれたこともあり、大変口数の少ない男児である。クラスでの観察、家族歴、生育歴より、このケースは、家庭面でのマイナス条件もみられるが、入園直後の適応という面では、大変マイナスの条件がかなり、たしかに場面絨然的傾向も

まうたか否定できないが、全体として、ことばの発達がおくれてしまったケースと考えられた。なお、WPPSIの結果は、言語性IQ、58、動作性IQ、87、全検査IQ、67であった。

Ⅱ部

研究課題：入園時年齢が、7カ月—1才11月の子供達の言語発達には、他の年齢に入園した子供達とくらべて、おくれがあるのとはならないだろうか。

研究対象及方法：スタッフ及設備面では、ほぼ同じと考えられる三つの保育園の年長児71名（実施者、84名、このうち片親、入院経験者、情緒障害児、IQ 70以下の子供を除いて71名）に、WPPSIテストを行ない、入園年齢別に、

Ⅰ、生後6カ月以前、入園児（15名）

Ⅱ、7カ月—1才11月入園児（18名）

Ⅲ、2才以後入園児（38名）

の三群に分けて、その結果の比較を行った。

結果：

	VIQ	PIQ	FIQ
Ⅰ群	116.1	117.8	120.7
Ⅱ群	106.1	116.0	113.1
Ⅲ群	110.7	113.9	114.8

（VIQ＝言語性IQ、PIQ＝動作性IQ、FIQ＝全検査IQ）、VIQ、PIQ、FIQともに、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ群の間に有意差はなかった。（尤検定、5%水準）つまり、7カ月—1才11月に入園した子供達が、他の年齢時に入園した子供達とくらべて、言語発達がおくるとはいえない。しかし、各群の内でのVIQとPIQ相互間の差については、Ⅰ群とⅢ群が、そのVIQとPIQ相互間に有意差がないのに比べ、Ⅱ群はそのVIQとPIQ相互間に、5%水準での有意差があった。つまり、Ⅰ群とⅢ群では、IQの中心として、VIQとPIQのバランスがとれていたが、Ⅱ群においては、PIQに比べて、VIQがおくるといふ特徴を示した。

結果の考察：上記の結果に対して、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ群の構成員への、一父母学歴による影響、兄弟姉妹の有無による影響、三男女差による影響、保健園児のちがいにによる影響をしろべだが、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの結果に影響を与えたとはいえない。また、田中二郎というケースを通して、入園時年齢と環境への適応力として言語発達への影響を、保育園児全般にわたってしらべ、7月—1才11月入園児はPIQよりVIQがおくるとわかった。